

南天

～八十八の星座をなぞる～

第三章

目次

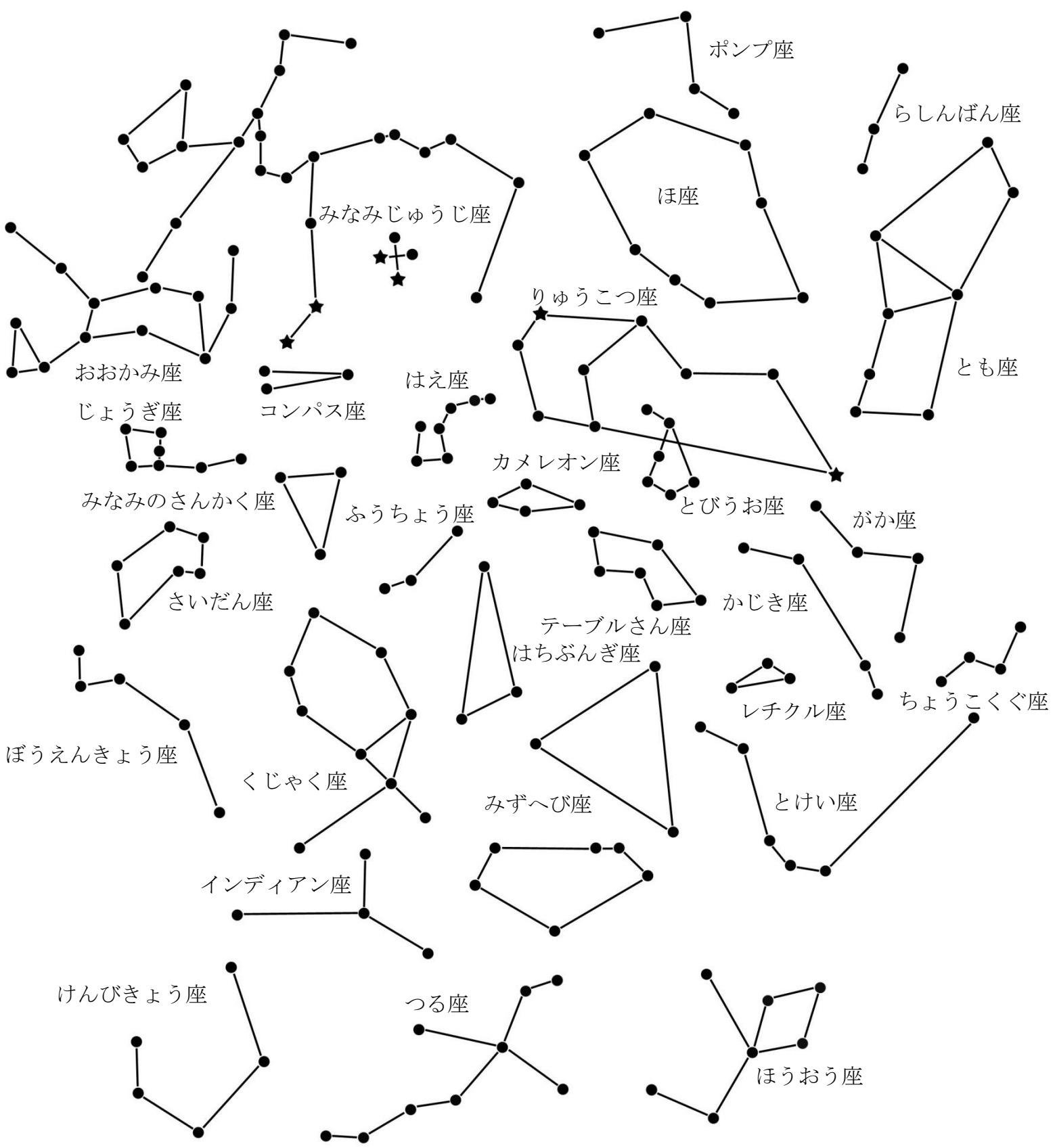
南天の星座

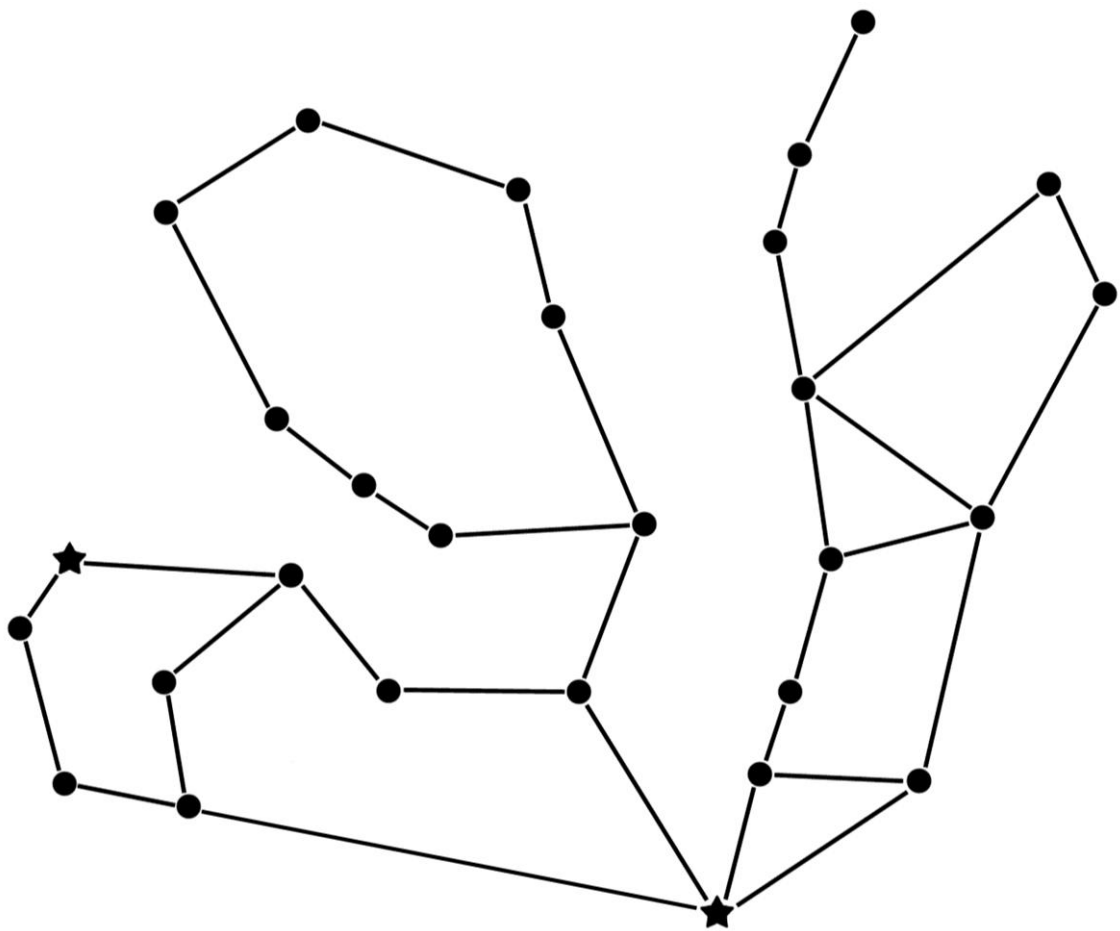
インディアン座	六頁	とびうお座	十三頁
おおかみ座	六頁	とも座	十四頁
がか座	七頁	はえ座	十四頁
かじき座	七頁	はちぶんぎ座	十五頁
カメレオン座	八頁	ふうちょう座	十五頁
きよしちょう座	八頁	ほ座	十五頁
くじゃく座	九頁	ぼうえんきょう座	十七頁
ケンタウルス座	九頁	みずへび座	十七頁
けんびきょう座	十頁	みなみじゅうじ座	十八頁
コンパス座	十頁	みなみのさんかく座	十九頁
さいだん座	十一頁	らしんばん座	十九頁
じょうぎ座	十一頁	りゅうこつ座	二十頁
ちょうこくぐ座	十二頁	レチクル座	二十一頁
テーブルさん座	十二頁	アルゴ座	五頁
とけい座	十三頁		
参考文献	二十二頁		

前書き

この冊子をお手に取っていただき、ありがとうございます。この冊子は三冊に渡って全天にある八十八の星座を紹介したものです。この冊子には星座と、それに属する星座や知識を載せています。ぜひ、堪能してください。また、星座は様々な結び方がありますが、その中でも私が選んだものを紹介しています。あらかじめご了承ください。

南





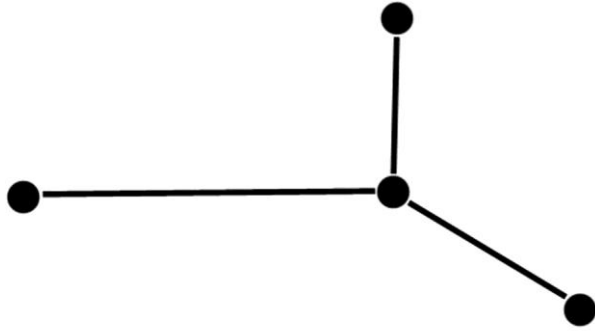
アルゴ座

現在は存在しない星座。ほ座、りゅうこつ座、とも座、らしんばん座に分けられて今は存在している。アルゴ座があった当時は全天で最も大きい星座であった。そして大きすぎたために四つに分割されたと言われている。

別名・アルゴ号座でもあり、ギリシャ神話の中で壮大な冒険をした船・アルゴ号が星座絵になっている。あまりにも壮大であるため、その冒険を詳しく書く一冊の本ができるかもしれない。

星がなくなった、爆発したからアルゴ座がなくなった、というわけではなく四つに分けられただけであるため、私たちが南半球に行って星座線を結ぶのは自由である。ぜひ一度、元最大の星座というものをこの目に焼き付けたいものである。

インディアン座



別名インダス座とも言われている。日本からは全貌を見ることができない南天の星座。南天の星空ではその姿を日本でいう秋の季節に見ることができる。しかし、三等星よりも明るい星はなく、見つけることは難しい。新しい星座のため、神話はないが一六〇三年に刊行された星図書・ウラノメトリア

に掲載され、知られるようになった。

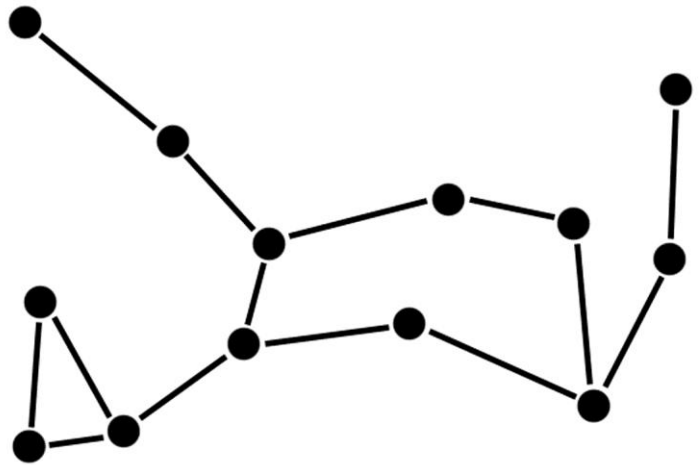
星座絵はインディアン、原住民のような人物が弓を持っている姿が描かれているものもあれば、インディアンが被る姿をよく見る羽冠が描かれているものがある。

おおかみ座

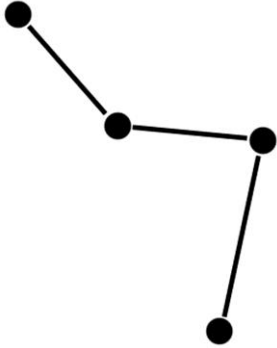
日本南部では観ることができる星座。二等星と三等星が多いが、さそり座のアンタレス、ケンタウルス座にある二つの一等星リギル・ケンタウルスとハダル・ケンタウルスなどに目が移ってしまいがちである。

ギリシャ神話では、神との宴に人肉を出したアルカディアの王・リュカオンが大神・ゼウスに姿を変えられ、天に上げられた姿であるとされている。天に上げら

れた後もさらなる罰を恐れ、北半球から南半球へと逃げようとしたところ、ケンタウルスに捕まったという続きの物語もあるが、定かではない。いずれにせよ、罪を犯したらその分をしっかりと償わなければならないのである。



がが座



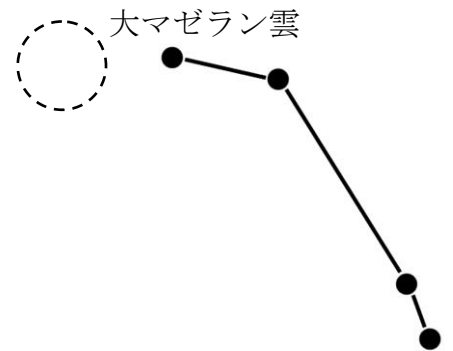
南天の星座で、日本でいう冬の季節にその姿を観ることができる。三等星よりも明るい星がないため、なかなか観つけることはできない。

「がが」と聞くと「画家」と思い、星座絵をどうしても人物に見がちではあるが、正しくは「画架」である。画架とは、絵を描くときにキャンパスなどを固定するための支持体のことである。

かじき座

南天の星座で、日本でいう冬の季節に観ることができる。しかし三等星より明るい星がなく、またあまり星座として大きくないことから、観ることは難しいが、銀河や星雲が近くにあるため、見応えはある。

星座絵は顔に大きく尖った部位がある魚・かじきが描かれているが、国際天文学連合ではシイラという魚が採用されている。



大マゼラン雲

かじき座は、かじき座とテーブルさん座の間にある大マゼラン雲という銀河が所属していることで有名である。大マゼラン雲は同じく南天にある銀河・小マゼラン雲と同じく伴銀河である。伴銀河とは、私たちがいる銀河系と重力の相互関係によって銀河系の周囲を公転している銀河のことである。大マゼラン雲はハッブル宇宙望遠鏡が約七年間の観測によって、中心部が二億五千万年で一回転していることがわかった。何事も研究を続けていけば解明されていくのである。さらにSN1987Aという、ニュートリノが初めて観測され、日本人の小柴昌俊がノーベル物理学賞を受賞するきっかけとなった超新星もある。

NGC 2070・タランチュラ星雲

大マゼラン雲の中にタランチュラ星雲を観測することができる。タランチュラ星雲はその名の通り蜘蛛のタランチュラのように見える輝線星雲のことである。恒星以外の天体の中では高い光度を持ち、大変見応えのあるものである。

カメレオン座



南天の天頂部分・天の南極付近に位置する星座。しかし、三等星以上の恒星がないことから、なかなか観つけることは難しい。また、この星座は日本のどの地域からでも観ることができない星座の一つである。

星座絵は私たちがよく知るカメレオンの姿が描かれている。また新しい星座のため、神話は存在しない。

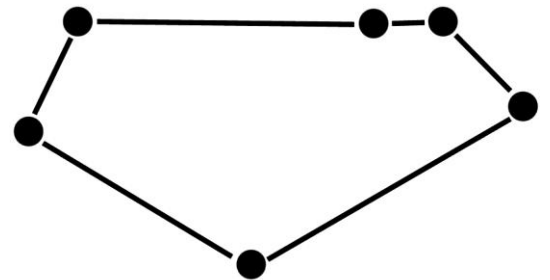
きょしちょう座

日本でいう秋の季節に観ることができる星座。日本の南部なら観測が可能であるが、三等星より明るい恒星が一つだけなので、見つけるのは少し難しい。

きょしちょう、というのは南米に住むオオハシ科の鳥のことを指している。日本ではあまり野生では生息していない鳥のため、親しみがないかもしれないが、中南米に生息する鳥として有名である。しかし星座絵はその鳥の姿にあまり似ていない。中南米で生息する鳥をモチーフにした星座であったため発見された当時は北半球の地域の人にはあまり親しまれず、呼称が違う地域もある。例えば、中国ではホトトギスに例えられ、杜鵑座と呼ばれている。



小マゼラン雲



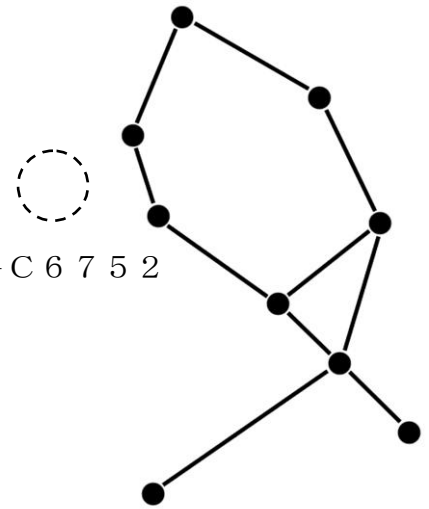
小マゼラン雲

きょしちょう座に属する銀河。しかし、位置的にはみずへび座に近い位置に存在する。小マゼラン雲は同じく南天の銀河・大マゼラン雲とともに銀河系の伴銀河である。伴銀河とは、私たちがいる銀河系と重力の相互関係によって銀河系の周囲を公転している銀河のことである。簡単にいうと、地球の周りを月が公転しているのと同じように、銀河系の回りを伴銀河と呼ばれる銀河が公転しているのである。

くじゃく座

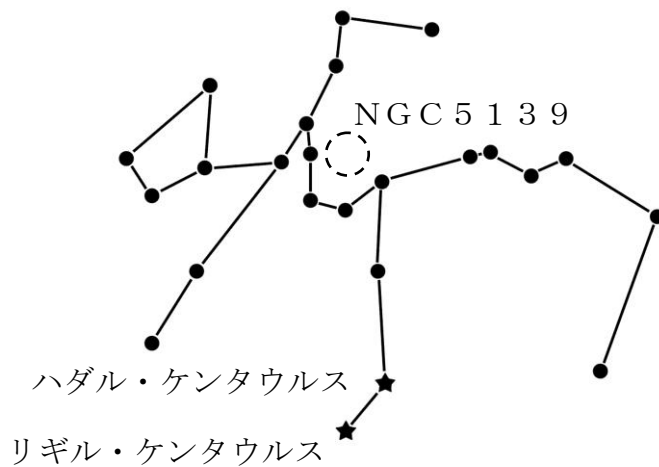
南天の天頂部分・天の南極付近に存在する星座であるが、あまり明るい星がなく、結ぶことは難しい。しかしNGC 6752という全天で三番目に明るいと言われる球状星団が存在しているため、一見の価値がある星団である。

新しい星座のため、神話はない。星座絵はくじゃくの姿が描かれているが、扇状に羽を広げたくじゃくが描かれている星座絵と羽を閉じたくじゃくの姿が描かれたものの二パターンがある。



NGC 6752

ケンタウルス座



ハダル・ケンタウルス

リギル・ケンタウルス

おおかみ座のすぐそばに位置する星座。日本では春から夏にかけて南の地域で観ることができる。全天で三つしかない一等星を二つ所有する星座でもある。一等星の名前はハダル・ケンタウルスとリギル・ケンタウルスである。ハダル、リギルと名前の後半のケンタウルスを省き、ハダル、リギルと呼ぶときもある。また

リギル・ケンタウルスの方が明るく、アルファ・ケンタウルスと呼ばれることもある。

ケンタウルス、というのは上半身が人間で下半身が牛という幻獣のことであり、星座絵もその姿が描かれている。ギリシャ神話では、テッサリア国の王・イクシオンとゼウスの正妻・ヘラをかたどった雲の人形から生まれた子がケンタウルス族の始まりであったとされている。人形から子供が生まれるという摩訶不思議な話である。ケンタウルス族で有名なのは勇者・ヘラクレスの武術の師匠であり、いて座の元となったケイロンがいる。

NGC 5139・ ω 星団（オメガ星団）

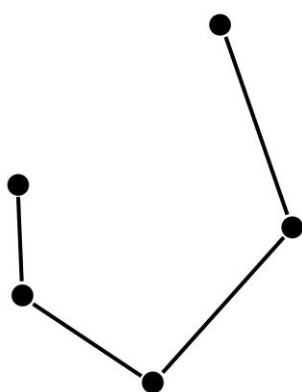
肉眼で見ることができる最も大きい球状星団で、中心部は星同士の間隔が近くなっている超高密度の星団という数少ないものである。星団であるが、星としてバイエル符号が付けられた形で、初めて作られた星図書・ウラノメトリアに ω （オメガ）星と記載されたため、名称が ω 星団となったと言われている。

ブーメラン星雲

一九八〇年に観測された星雲で、観測された当時は非対称なカーブを描き、ブーメランのような星雲であったことからこの名称が付けられた。しかし、一九九八年にハッブル宇宙望遠鏡が観測を行ったところ、蝶ネクタイのような姿になっていた。星雲、星団など、天体は日々、形状を変えているのである。

また、この星雲は自然界で最も温度が低い場所であるとされている。その温度はなんと絶対零度（ -273.15°C ）よりも 1°C 高いだけであるとされている。この温度は宇宙の温度よりも低い唯一の場所であるとも言われている。

けんびきょう座



元はみなみのうお座の一部であったが切り取られて作られた星座で、日本でいう秋の季節に南半球で観ることができる。最も明るい星でも五等星くらいであるため、なかなか星座線を結ぶことは至難の業である。

星座絵は今のよう顕微鏡の姿ではなく、昔の木製の顕微鏡が描かれている。

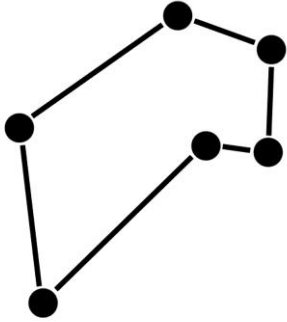
コンパス座

ケンタウルス座の二つの一等星のハダル・ケンタウルスとリギル・ケンタウルスのすぐ近くにあるため、観測することは少し難しい。

星座絵は名前の通りコンパスを描いているかと思いきや、ディバイダという測量器具の姿が描かれている。コンパス座の近くにじょうぎ座があり、製図用具関係の星座が固まっている印象を受ける。



さいだん座



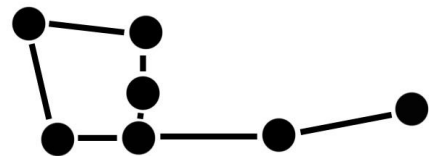
南天の星座でありながらトレミーの四十八星座の一つである小さな星座。日本でいう夏の季節に観ることができる。さそり座の南に位置する星座であり、大まかな位置は把握できるが、結ぶことは難しい。

さいだん座は名前の通り祭壇を表しており、星座絵もその姿が描かれている。一説では大神・ゼウスの父・クロノスと巨大な体を持つ一族・ティターン族が休戦を行うときに使われた祭壇であるとされている。その後、ティターン族はクロノスと講和するが、クロノスに刃向った、のちの大神・ゼウスによって地底に封じ込められたとされている。その後、地底の奥底でティターン族が暴れると地震が起こると言われるようになった。

じょうぎ座

南天の星座で、日本でいう夏の季節に観ることができる。ケンタウルス座、おおかみ座とさそり座の間にある星座で小さく、三等星よりも明るい星がないため、観ることは難しい。

じょうぎ座は私たちが昔、筆箱に入れていたようなものさしではなく、製図に使われるような金物の定規を星座絵で表している。もともとは定規のように長い姿を表していたが、じょうぎ座の複数個の星がさそり座の一部として扱われるようになったため、今のような短い星座になってしまった。



ちょうこくぐ座

日本でいう冬の季節に観ることができる南天の星座。あまり明るい星がないが、ちょうこくしつ座銀河という渦巻銀河があり、星の形成が活発に行われている。



星座絵は名前の通り彫刻具が描かれているが、さまざまな説がある。私たちがよく知る彫刻刀などの彫刻具が描かれているものもあれば、武器などに図柄を掘るための工具を描いているものもある。彫刻刀やノミなどの彫刻具が交差する姿

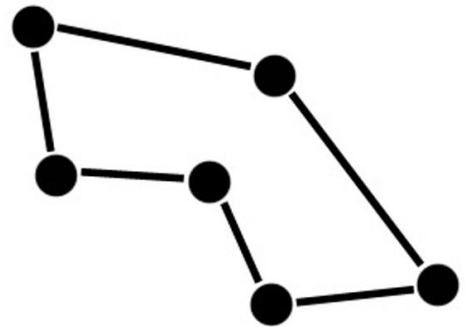
がよく知られている。

テーブルさん座

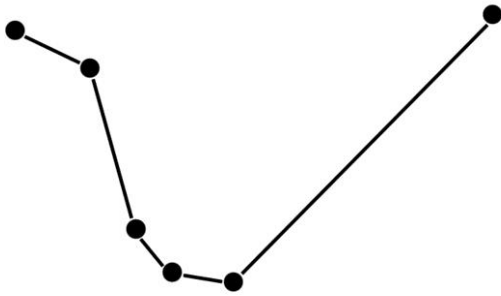
かじき座より天頂に目を移したところにある星座。最も明るい星でも五等星であるため、観つけることはなかなか難しい。そして、そもそも日本からは全く観ることができない星座である。隣にはかじき座があり、境界線には大マゼラン雲がある。

テーブルさん座は南アフリカのケープタウンという場所にあるテーブル山が元になっている。テーブル山は、南天の星座を数多く制定したニコラ・ルイ・ド・ラカーユが観測を行っていた場所

である。また、今でもこの場所に行くと南天の星座や南天の星雲・イータカリ一ナ星雲の全貌を観測することができる場所である。天文を好きな身としては一度行ってみたい場所である。



とけい座

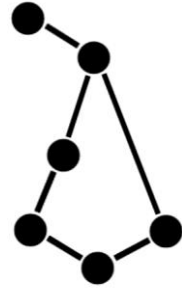


南天の星座で、日本でいう冬の季節に観ることが可能。ただし、明るい星が少ないことからなかなか見つけることが難しい。星座絵は、星座点の姿から長針と短針の姿を思い描くかもしれないが、実際は振り子時計の姿を表している。

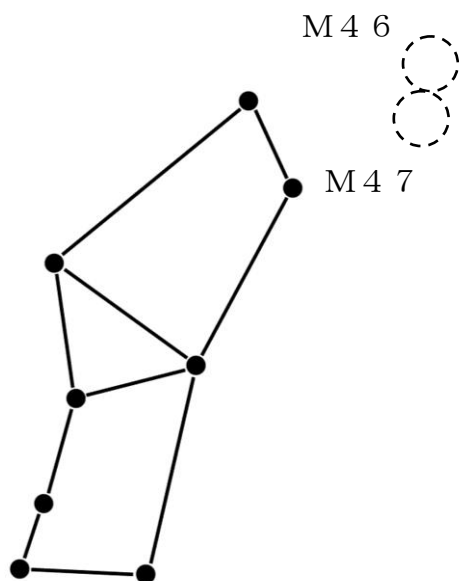
とびうお座

南天の星座でりゅうこつ座と星座線が交差している星座。あまり明るい星がなく、すぐそばに一等星・カノープスがあるため、結ぶことはなかなか難しい。交差している場合をこの冊子では取り上げているが、星座線の結び方によっては交差しない場合もある。ぜひ調べてみて一番納得がいく星座線を信じて結んでほしい。

星座絵はその名の通りとびうおが描かれている。神話は新しい星座であるため存在しない。



とも座



ニコラ・ルイ・ド・ラカーユによって、元全天で最も大きい星座・アルゴ座が四つに分割された。その四つの星座のうちの一つ。アルゴ座は船を表しており、その船尾部分に位置するのがこの星座である。南半球で観る場合はりゅうこつ座の一等星カノープスから地平線へと伸びた先にあるため比較的見つけやすい。日本ではおおいぬ座の南、空の低い位置にしか出てこないため、観ることが難しい。

星座絵はとも座としてあるのではなく、アルゴ座の星座絵の対応する部分の星座絵があてがわれている。また、神話はとも座としてあるのではなく、アルゴ座としての神話がある。アルゴ座の神話はアルゴ号という船が冒険する壮大な神話が伝えられているが、ここでは割愛する。

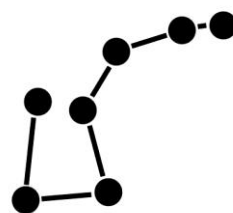
南天の二重星団

M46とM47のこと。ともに散開星団であり、とも座から見てらしんばん座の方向にある星団。同じ散開星団であるが、対照的な違いがあるため、観ると大変興味をひかれるものとなっている。ぜひ実際に観てみたいものである。

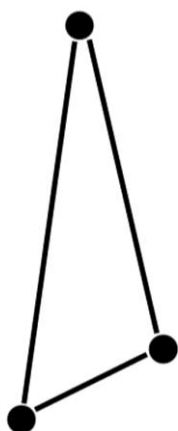
はえ座

天の南極の近くに位置するため、日本からは沖縄などの最南端くらい場所からしか観ることができない。

最古の星図書・ウラノメトリアではみつばち座と記載されていたが、後に発行された星図書ではえ座、はち座、みつばち座の三つが紹介されややこしくなった。のちに天文学者のニコラ・ルイ・ド・ラカーユが、はえ座を採用したことによりはえ座という名称が現在も残っている。個人的な印象だが蠅よりも蜂の方が好印象を持てる星座になったのではないだろうか。星座絵も蠅の姿が描かれているが、みつばち座であったときはどのような星座絵があてがわれていたのか。少し気になるところである。



はちぶんぎ座



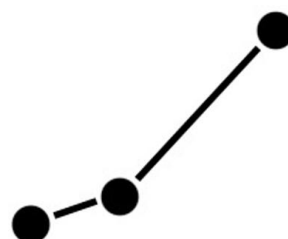
天の南極が存在するとされている星座であるが、北極星のようにはっきりと明るい星がないため、南極星と呼ばれる星がない。また日本からは全く見ることができない星座の一つである。

八分儀とは天体を観測するとき用いられる器具であり、星座絵もこの姿が描かれている。新しい星座のため神話は存在しない。

ふうちょう座

南天の星座で天の南極に近い位置に存在する星座。日本からは見ることができない星座の一つ。日本からは観ることができないなら、南半球からなら観ることができるのか、というと明るい星がなくなかなか難しい。

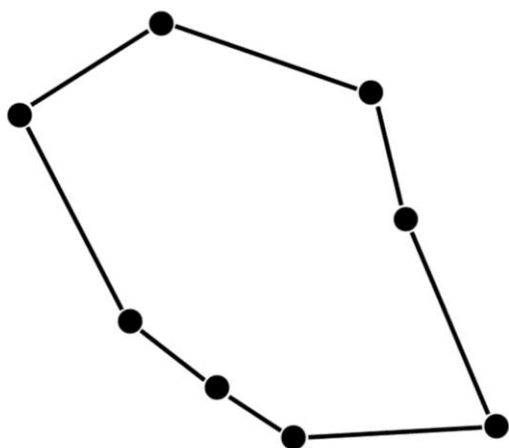
ふうちょうというのはオーストラリアの熱帯区にいる鳥・フウチョウ族のことである。極楽鳥の名前でも有名である。星座絵もこの鳥が描かれている。



ほ座

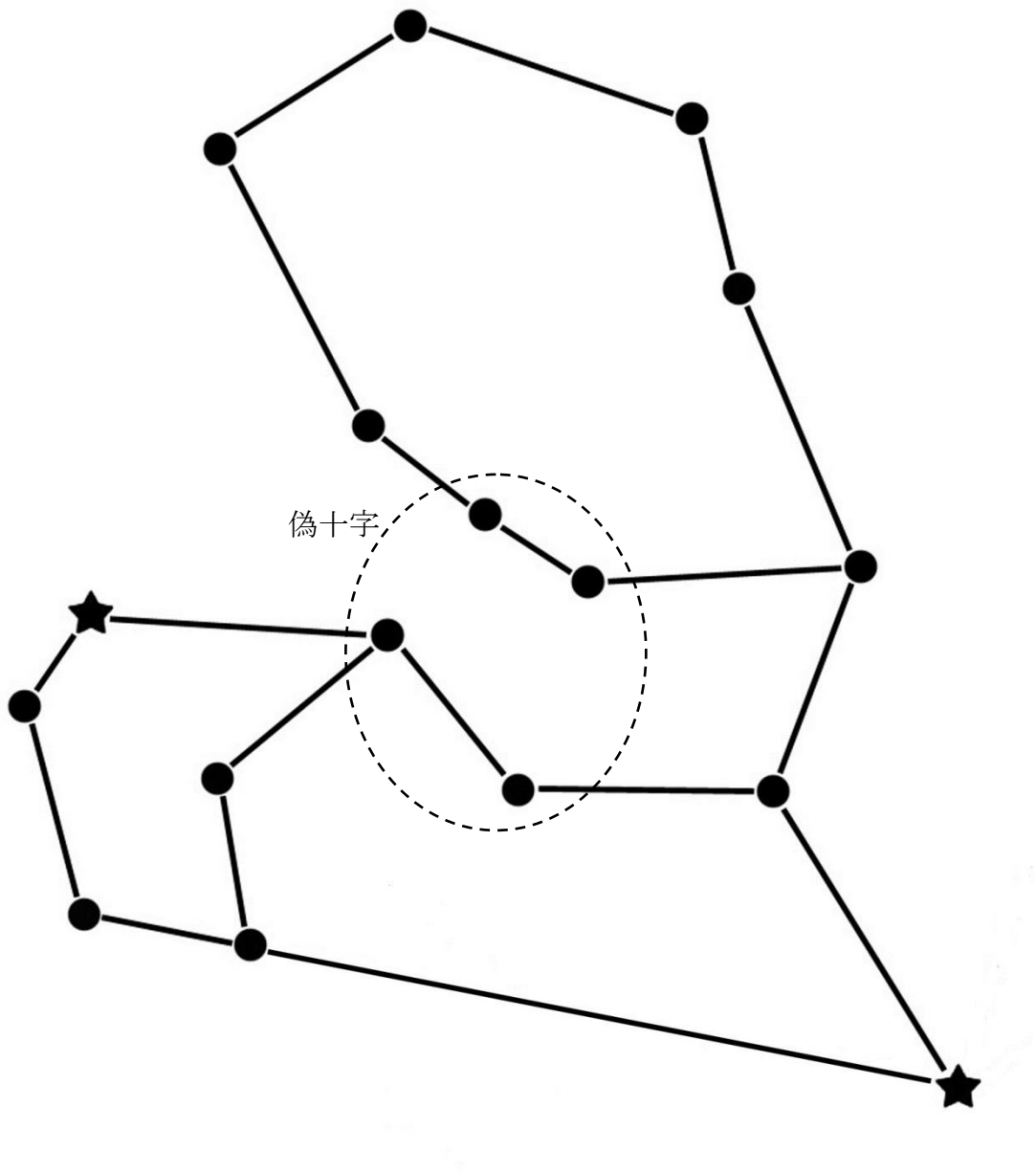
ニコラ・ルイ・ド・ラカーユによって、元全天で最も大きい星座・アルゴ座が四つに分割された。その四つの星座のうちの一つ。あまり明るい星がないため結ぶことは難しいが、偽十字などの星の並びや、NGC 3132、超新星残骸のガム星雲などの天体があり、見応えがある。

名前の通りアルゴ号の帆の部分に位置し、星座絵もその箇所があてがわれている。また、神話はとも座としてあるのではなく、アルゴ座としての神話がある。アルゴ座の神話はアルゴ号という船が冒険する壮大な神話が伝えられているが、ここでは割愛する。

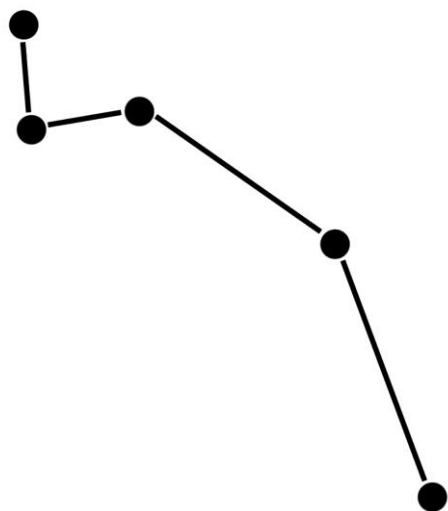


偽十字

ほ座の δ 星と κ 星とりゅうこつ座の ι 星と ε 星を結ぶと十字架の形になる。この十字架はすぐ西にある方角を知るのに必要な南天の星座・みなみじゅうじ座と大変似ており、大航海時代にはまぎらわしい星の並びとして知名度を上げた。ちなみに「 δ 星」や「 κ 星」というのはバイエル符号を用いた星の表し方である。その星座を構成する星に明るいものから順番に、ギリシャ文字があてがわれている。



ぼうえんきょう座



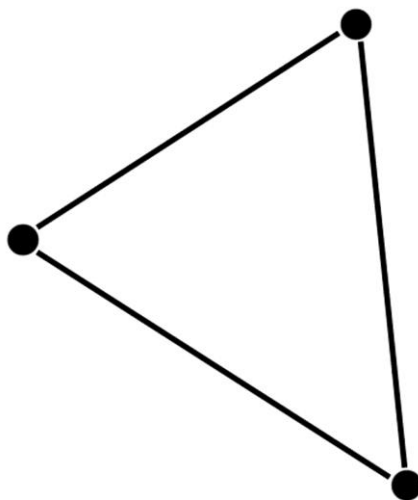
日本でいう夏から秋にかけての季節に現れるが、九州以南の地域でしか観ることができない。作られた当時は星座の区分が大きく、所属する星も多かったのだが、いて座やへびつかい座などに所属する星へと変わってしまい、今では小さく暗い星で構成される星座となってしまったため、結ぶことは難しい。

星座絵は観測でお世話になる望遠鏡・屈折式望遠鏡が描かれている。天文が好きな人としては、この星座を一度観てみたいと思うのではないだろうか。

みずへび座

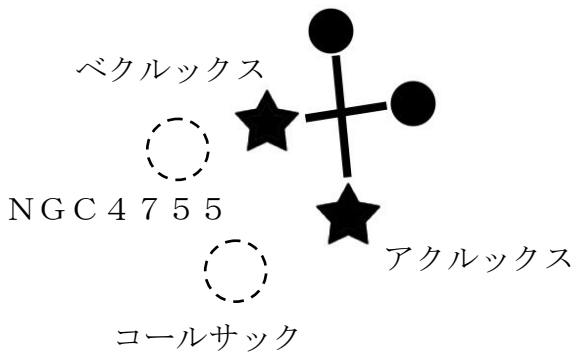
元南極星が存在している星座で、日本でいう秋から冬の季節に観ることができる。小マゼラン雲と大マゼラン雲の間を埋めるように存在する。みずへび座はうみへび座と対をなす星座としてでき、うみへび座が雌であるため、みずへび座は雄として扱われている。天文学者・ニコラ・ルイ・ド・ラカーユは雄のうみへびとして扱っていた。

星座絵はうみへび座よりもかなり小さい蛇が描かれている。その姿から日本ではこうみへび座と呼ばれていたこともあった。



みなみじゅうじ座

ケンタウルス座に囲われるように存在する南天の星座の代表格ともいえる星座。アクルックスとベクルックスという一等星が二つある数少ない星座である。一等星が二つあること、ケンタウルス座に囲われるようにあるというわかりやすい位置から非常に観やすい星座である。日本でも南部ならその姿を観ることができる。また、サザンクロスという通称でノーザンクロス、はくちょう座と対をなす星座であるともされている。



この星座は、北半球で北斗七星が北極星を見つけるのに役立つように、南半球で南極星、天の南極を探すのに役立つ。一等星・アクルックス

から伸びる星座線をそのまま、星座を超えて約五倍伸ばした先に南極星があるとされているが、現在はめぼしい星がないため、天の南極という大体の場所を指す名前が付けられている。

星座絵は十字架が描かれており、このことから日本ではじゅうじか座とも呼ばれている。

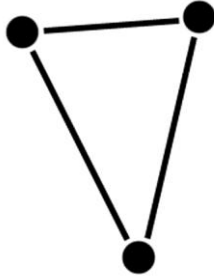
NGC 4755

みなみじゅうじ座の西に位置する散開星団。散開星団という名前ではあるが、星団の範囲は狭い。そのため約百個もの若い星が集まり大変美しい姿を観ることができる。この美しさから南天の宝石箱や、ジュエルボックスと呼ばれている。

コールサック

みなみじゅうじ座の南に位置する暗黒星雲。全天で最も目立つ暗黒星雲とされており、天の川の中にポツカリと穴が開いているように見えるその姿は、普段暗い空の中にある明るい星を観ている私たちにとって、真逆のものとなるため、不思議な感覚に陥る。ちなみにコールサックとは石炭袋のことである。

みなみのさんかく座



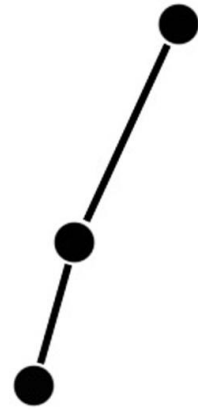
コンパス座やじょうぎ座の西に位置する星座で二等星と三等星から構成されている。日本でいう夏から秋の季節の移り目に観ることができる。北半球にあるさんかく座とは特に対をなしてはいない。

星座絵は三角形である。神話はない。

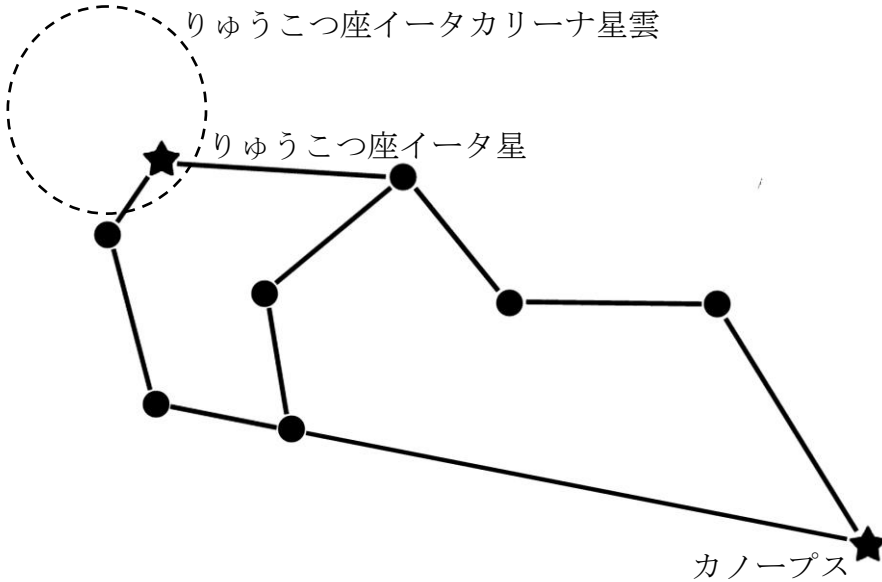
らしんばん座

ニコラ・ルイ・ド・ラカーユによって、元全天で最も大きい星座・アルゴ座が四つに分割された。その四つの星座のうちの一つ。とも座から連なる部分に位置する。あまり明るい星がないため結ぶことは難しい。日本でも周りの開けた場所なら観ることができる場合がある。

星座絵はらしんぼんの姿が描かれているが、アルゴ座の星座絵と重ねた場合、船の構造的にとんでもないところに羅針盤があることになる。また、神話はらしんばん座としてあるのではなく、アルゴ座としての神話がある。アルゴ座の神話はアルゴ号という船が冒険する壮大な神話が伝えられているが、ここでは割愛する。



りゅうこつ座



ニコラ・ルイ・ド・ラカージュによって、元全天で最も大きい星座・アルゴ座が四つに分割された。その四つの星座のうちの一つ。日本でも南の方からなら少しだけ観ることができる。全天二十一の一等星のうちの一つ、カノープスや、全天で最も見応えがあるりゅうこつ座イータタリナ星雲、南

のプレアデスがあり大変見応えのある星座である。後者の二つは南半球の最南端に近い場所であれば、肉眼での観測も可能である。

アルゴ号の船底部分に位置し、星座絵もその箇所があてがわれている。また、神話はりゅうこつ座としてあるのではなく、アルゴ座としての神話がある。アルゴ座の神話はアルゴ号という船が冒険する壮大な神話が伝えられているが、ここでは割愛する。

一等星・カノープス

全天二十一の一等星のうちの一つであり、シリウスに次いで全天で二番目に明るい恒星である。この星を観た人は長生きをする、とも言われており別名、南極老人星とも言われている。一万二千年後には南極星になるとも言われている。

りゅうこつ座イータカリーナ星雲

りゅうこつ座の η 星の周辺にある散開星雲で内部に複数の星雲を含む。北半球からはなかなか観ることができないが、南半球からだ夜空を華やかに彩る天体の一つである。内部に含まれる星雲としては、人形星雲、鍵穴星雲、ミスティックマウンテンが有名である。

人形星雲は名前の通り人形のように星間ガスが広がる星雲で、りゅうこつ座 η 星を覆うように存在している。

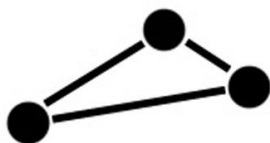
鍵穴星雲はイータカリーナ星雲の内部に存在する分子雲である。分子雲とは星が生み出される場所のことである。星雲の中にある分子雲が鍵穴のように見えるのである。また、鍵穴星雲の近くに星雲内部に含まれていない分子雲もあり、その部分は神の指と呼ばれている。

ミスティックマウンテンはハッブル宇宙望遠鏡が二十周年を記念して撮影した部分のことである。画像で見ると大変美しい。

わずか一部分ではあるがこれだけの見応えのある星雲があるのは全天でもこの場所だけである。もし、この星雲を観るのであれば、アフリカの南端の街・ケープタウンやそのさらに南、喜望峰から観ると大変美しい姿を満喫することができる。

レチクル座

日本でいう冬の季節に観ることができる南天の星座。とけい座とかじき座にはさまれるように存在する。星座としては小さく、明るい星もないため星座線を結ぶことはなかなか難しい。



レチクル、というのは望遠鏡で空を観るときに使う十字線の入った照準器のことで、星座絵もその姿が描かれている。新しい星座のため、神話は存在しない。

参考文献

『星空の神々 全天88星座の神話・伝承』長島昌裕 著 親紀元社 一九九九年

『春・夏・秋・冬・南天 星座・星雲・星団ガイドブック』八板康磨 著 新星出版社 二〇〇〇年

『星座の事典』沼澤茂美／脇屋奈々代 著 ナツメ社 二〇〇七年

『改定新版 全天星座百科』藤井旭 著 河出書房新社 二〇一三年

後書き

いかがでしたでしょうか？南天の夜空は北半球の式の夜空のように『〇〇のダイヤモンド』や『〇〇の大三角』などはありません。しかし、みなみじゅうじ座やその周辺の星雲、大マゼラン雲などの銀河と観どころがいっぱいあります。南半球に行く機会があれば、ぜひ一度その姿を観てください。そのときにこの冊子が皆さんの観測をよりよいものにしてくれれば、本望です。

制作者 Nakamura

発行 天文サークル 星宿

<http://hoshiyado.com/>